

令和6年度 小平市立小平第五中学校 学校評価報告書

学校教育目標

- 考える人間
- たくまい人間
- 思いやりのある人間

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 ○ 生徒にとって楽しく安心して過ごせる「居場所」であり、自立に向け社会性を身に付ける「学びの場」である学校
- 【目指す児童・生徒像】 ○ 規律を守りつつ自他を尊重し、社会に貢献できる生徒
○ 自ら学び、よく考え、正しい判断ができる生徒
- 「チーム五中」
- 【目指す教員像】 ○ 生徒一人一人を大切に、生徒の良さと個性を伸長する教職員
○ 教師同士が互いを認め、信頼し、協力できる教職員
○ 常に自らを振り返り、日々研鑽に努め、切磋琢磨できる教職員
○ 地域や保護者と積極的に関わり、信頼に応える教職員

前年度までの学校経営上の成果と課題

教職員組織が目指す学校像、生徒像及び教員像を共有し、学習指導や生活指導を行うことで、生徒の実態に合わせた授業改善及びトラブルやいじめの早期発見、早期対応ができた。不登校生徒について生徒一人ひとりの状況に合わせた支援を行ったが登校再開に至らない生徒も多かったことが課題である。

	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標			
学力向上	・授業毎のねらいの明示 ・単元ごとの授業内容の振り返り	4	3	管理職による授業観察終了後の指導や生徒による授業評価の分析を教員が個々に行うことで、ねらいと振り返りを効果的に取り入れた授業改善につなげた。	・どの生徒にも分かりやすい授業を今後も目指し、引き続き授業観察、研修、分析を行ってほしい。 ・ICTの活用については、より効果的な使い方を研究していただくとよい。 ・AIDリルについては、家庭学習でより活用できるように促していけるとよい。	・引き続き、授業観察を行い、ねらいと振り返りを明確にした授業を徹底させる。 ・令和7年度は校内研究にて研究授業を実施し、各学年が研究を通して授業改善に取り組むようにする。
	・場面に応じた授業支援ソフトの活用 ・AIDリルの家庭学習等での活用	3	3	教員間でICT機器の活用力に差があることから、校内研修会にて授業支援ソフトの活用方法について学んだ。AIDリルの活用方法についての説明を全ての学年の保護者会で行い、リーフレットを配布するとともに、教員にも活用を促した。	・テスト勉強と関連付けられるとよいのではないかとと思う。 ・放課後教室をうまく活用し、学力向上を目指していけるとよい。	・AIDリルの活用方法について、工夫・改善するとともに、保護者会にて家庭での活用について説明し促す。 ・放課後学習教室での活用について模索する。
健全育成（いじめ防止）	・こだいら特別活動の日に立てた目標達成に全校で取り組む ・学校行事では生徒が考え、工夫し、取り組む	4	4	生徒会が中心となり、中学校区で立てた行動目標に沿って活動し、五中校区独自の児童会・生徒会サミットにつなげた。 運動会や合唱コンクールで各学級から選出した実行委員が中心となって準備を進め、生徒主体の行事となった。	・学校行事については、多くの生徒が主体的に活動している姿が保護者にも理解してもらえていると思う。 ・日々の活動も同様に行われているので、それをより理解してもらえるような広報活動が必要かと思われる。 ・「いのちの授業」については保護者の認知度が低く残念である。様々な状況の生徒がいるので、担任に限らず、相談できる場、大人がいることをアピールできるとよい。 ・学校行事は生徒主体になっていると感じる。もっと生徒に委ねても良い。	・「感動体験」をテーマとして、生徒の主体的な活動を目指した取組を一層充実させる。
	・生徒が教員等に相談しやすい関係づくり ・全学年で発達段階に応じた外部講師による性の授業を実施 ・いじめ調査の定期的な実施による実態把握と対応	4	3	「どの教員にも相談しやすい学年」を目指し、副担任や学年主任も相談に乗れる体制を構築した。 「いのちの授業」を全学年で実施し、学年の発達段階に応じた性に関する指導を行った。 いじめ調査を実施し、記述のあった生徒への確実な聞き取りと情報共有、組織的な対応を行った。		・「いのちの授業」については保護者への周知を充実させ、学校と家庭が共通の認識のもとで生徒と関われるようにしていく。 ・いじめについて、改訂した学校いじめ防止基本方針の周知や共通理解を進めながら、対応していく。
特別支援教育の	「合理的配慮が進んだか」「支援を要する生徒に具体的な対応ができたか」についての教員アンケートの実施	4	4	年度当初の職員会議をはじめとして、毎週開催する校内委員会にて個別の配慮が必要な生徒への具体的な配慮について共有するとともに、多様性、特別支援等への理解を深め、対応に生かした。 教員アンケートの結果は肯定的な回答が約91%であった。	・特別支援学級理解教育授業の実施をはじめ、具体的な取組の成果が表れているので、今後も引き続き進めていっていただきたい。 ・やはり教職員の理解が大切だと思われるので、校内委員会を充実させ、交流給食なども続けていただきたい。 ・教員だけではなく、生徒たちが交流する機会を増やせるとよい。	・校内委員会での共通理解や検討、教職員への周知をと おして、学校から生徒や保護者と丁寧に関連した合理的 配慮を行えるようにする。
	特別支援学級理解教育授業を毎年1年生で実施し、通常級教職員が固定級と交流給食を実施	3	4	特別支援学級理解教育授業を各学年にて実施した。 通常の学級の教員が、特別支援学級の給食に参加する、交流給食を実施した。		・給食交流を通年で実施し、教職員の特別支援学級への理解を深める。 ・令和7年度も特別支援学級理解教育授業を各学年で実施する。
業務改善・働き方	・校務分掌ごとの年間計画の確認 ・優先度の低い業務の洗い出し ・担当業務の割り振り状況確認と実態に合わせた再検討	3	3	校務分掌ごとに年間の業務の見通しをもち、各主任が進捗を確認しながら業務に取り組んだ。業務の割り振りや優先度の低い業務の洗い出しについて、学校評価を通じて進めた。	・ICTを活用し、時間の削減を行えたことはよいと思う。 ・校務分掌、学年ごとの引き継ぎがうまくできていないことは問題だと思うので、しっかりと引き継げるシステムを考えていっていただきたい。 ・各教員が年間の業務の見通し、また担任については生徒の3年間の見通しをもって指導していけるようにできるとよいと思う。	・教職員一人一人との対話を通じて、各教員の資質能力を引き出せる校務分掌の配置を行う。 ・学校評価や学校行事ごとの反省を踏まえ、確実な引き継ぎをととした業務改善や臨機応変な業務割り振りを行う。
	・ICTを活用した連絡事項伝達や打ち合わせ時間の削減 ・家庭連絡や欠席連絡、校内連絡のICT化	3	3	管理職や教職員からの連絡を校務支援システムでの連絡に切り替え、重要な連絡のみに絞ることで、朝の打ち合わせや業務連絡の時間の削減を行った。 家庭連絡や欠席連絡にメール配信システムを活用した。	・お便り等のスクールメールの配信が増えたので情報が伝わりやすくなっていると感じる。	・引き続き、ICTを活用した情報共有を行う。 ・家庭との連絡について、効率化する部分と直接、丁寧により取りする部分を見極めながら業務削減を行う。